

2010 年度

東邦大学医学部看護学科・河南科技大学臨床医学院

国際学術交流プログラム

渡航報告書

## 目次

1. 渡航者
2. プログラム日程
3. 渡航者の報告

国際交流委員名、作成月日など

## 1. 渡航者

齋藤 益子 教授 (家族・生殖看護学研究室)

小林 寅喆 教授 (感染制御学研究室)

近藤 麻理 教授 (国際保健看護学研究室)

出野 慶子 教授 (小児看護学研究室)

## 2. プログラム日程

月日	時間	内容		備考
2010年 8月1日 日曜日	20:40	洛陽到達 牡丹城澳門食街 夕食		MU5227 北京 →洛陽 20:40時 到達 新友誼大酒店 宿泊 王朝娟 趙傑剛
8月2日 月曜日	07:00-07:40	朝食(雅香樓)		趙傑剛
	08:00-10:00	講演(綜合ビル学术交流ホール) 近藤麻理教授「日本における看護師の院内教育」		趙傑剛
	10:20-17:30	竜門石窟、関帝廟観光		日本語ガイド于 愛紅
	18:00-20:00	歓迎パーティー(新友誼大酒店)		ほう院長、張書 記、王院長、王 朝娟 趙傑剛
8月3日 火曜日	08:00-09:00	朝食(新友誼大酒店)		趙傑剛
	09:00-11:30	白馬寺観光		日本語ガイド 于愛紅
	14:00-16:00	洛阳市糖尿病学会 綜合ビル3階 学术交流ホール 出野慶子教授「小児糖尿病キャンプにおける看護師の看護活動」 小林寅喆教授「病院感染対策と血流感染症」		趙傑剛通訳
	16:30-18:00	小林教授 出野教授 休憩	齊藤教授 近藤教授鄭州へ	王朝娟 趙傑剛
	18:00-19:00	夕食 (上海人家料理店)	鄭州で夕食 鄭州大酒店泊	于愛紅 史素玲 王朝娟 趙傑剛

8月4日 水曜日	07:00-08:00	朝食(新友谊)	鄭州で朝食	于愛紅 史素玲 王朝娟 趙傑剛
	08:00-11:30	小林教授 出野教授 09:00-10:00: 小児科病棟見学 10:30-11:30: 学生と座談会	河南省看護健康教育学会にて ご講演 齋藤益子教授 「日本の母子保健の現状と看護」 近藤麻理教授 「日本の看護師の継続教育」 趙傑剛通訳	
	12:00-13:00	昼食(老洛陽面館)	鄭州で昼食	王朝娟 趙傑剛
	14:00-18:00	買いもの	洛陽へ	
	19:00-20:30	送別パーティー(雅香楼)		張書記、王院長
8月5日 木曜日	08:00-09:00	朝食(新友谊大酒店)		王朝娟 趙傑剛
	9:00	洛陽空港へ(10:25 洛陽→北京)MU5696		王朝娟 趙傑剛

## 河南省科技大学における研修を終えて

家族・生殖看護学 齋藤益子

### はじめに

平成 22 年 8 月 1 日～5 日までの 5 日間、河南省科技大学で研修する機会を得た。河南省は中国北京から飛行機で 1 時間ほど内陸に入った古い都である。数年前に中国の西安の都からシルクロードを通してトルファンに抜けたのが懐かしく思い出される旅であった。北京空港はオリンピックの開催後ということもあって一段と大きくなり、河南省に行く国内便のターミナルまでバスで約 30 分も要するほどであった。

日本も猛暑が続いていたが、中国も酷暑であり、滞在中 38℃を記録したこともあった。世界遺産である竜門石仏の訪問は猛暑のなかでの訪問で、大陸の暑さを実感するひと時であり、遺跡の麓をながれる川は数日前の豪雨で洪水になったとのことで、道の脇には水溜りが残っていた(写真)。

### 健康教育学会での講演

河南省科技大学の看護部長は主任看護師(主任看護師は臨床看護師の最高の地位)で看護協会の役員でもあり、私たちの訪問する日程に併せて河南省での看護学会を開催するように手配してあった。洛陽から 3 時間ほど離れた河南省の州都で「健康教育学会」が開催され、約 300 名の参加者が集まっていた。1 時間の予定で日本の母子保健について報告したが、残念なことに中国の出生数や死亡数合計特殊出生率などは公表されたものではなく、一人っ子政策がとられていることはわかるが、母子保健上どのような問題があるのか、把握することはできなかった。私は、「日本における母子保健の現状」というテーマで講演を行った。

講演内容は日本の母子保健統計の紹介や周産期死亡や妊産婦死亡の問題、思春期の性の諸問題、性に関する情報の規制や性教育のあり方などについてであった。質問は周産期に関するものが多く、妊娠・出産の具体的な管理法、帝王切開後の妊婦の管理・母乳育児に関する事などであった。思春期教育・性教育に関する質問は全くなく、また、子どもの虐待に関する問題も中国では全くないということであった。リプロヘルスの概念は中国では関心は薄い様であり、性感染症や人工妊娠中絶、不妊などについては看護の問題として取り扱われていない感じられた。昨年、北京でアジア性科学学会が開催され、中国の HIV/AIDS の感染率が高いことが国際的に話題になっているが、性に関する事はマイナーなことで、タブー視する傾向があり、看護の問題としては取り上げにくいことなのだと思われた。

### 大学附属病院の見学

科技大学の実習室と病院の産科関連施設を見せて頂いた。病院は古い施設のみしか見なかったが、分娩室は日本の手術室の様であり、ストレッチャの様な分娩台があるだけで、質素であった。病院の産科棟の雰囲気などからは妊産婦の QOL のレベルはそれほど高くないことは推測された。

日本の分娩台を見なれた目からすると、妊婦が出産している姿が想像し難く、帝王切開の場面がイメージされ、出産は手術と同じ扱いなのかと思われた。妊婦さんは殆ど動かずに出産するのであろうか。麻酔分娩が多いからかもしれない。陣痛が来ている分娩前の産婦さんが入院してい

る部屋の前を通った。産婦は家族が付き添っているか、誰もついていない人が殆どで、日本の様に助産師がついてケアしている様子はなく、分娩第1期は自分たちだけで過ごしている様子であった。日本も10数年前は同じような状況であったことを思い出し、今日の日本はアクティブベースが導入されて院内助産活動が活発になってきているが、中国の出産・育児へのケアはこれからの課題なのだと思われた。

以前、日中合同研究で中国の出産について調査した際に、帝王切開率が50%近かったことを思い出し、今はどのようになっているのか妊娠・分娩の管理や母乳育児、育児支援のあり方などについて、機会があればまた共同研究で調査してみたいと思った。

### おわりに

わずかな滞在であったが、洛陽の科技大学の関係者から暖かなおもてなしを受けた。昨年東邦大学に研修にきた方や今年10月に来学予定の看護師の方ともお会いすることができた。近くて遠い国である中国であるが、このような機会にお互いの文化を理解し、民間レベルでの交流を進めていくことの大切さを実感した5日間であった。研修の機会を与えて頂きました大学関係者の皆様、また研修の企画運営などに関わって頂いた国際交流委員会の皆様に感謝いたします。



## 河南科技大学訪問

感染制御学研究室 小林 寅喆

河南省は北京より南西に位置し、訪問先の洛陽は人口 2000 万人の都市である。また、中国古代の政治経済の中心地の一つで古都としても有名である。洛陽空港は比較的新しく、イメージしていた田舎の空港とはかけ離れていた。到着が 21 時近くにも関わらず、訪問先である河南科技大学、赵杰刚准教授と河南第一付属病院、王朝娟看護部長による歓待を受けた。今回の訪問は斎藤益子教授(家族・生殖看護学)、近藤麻理教授(国際保健看護学)、出野慶子教授(小児看護学)と私の 4 人で、8 月 1 日から 5 日までの 5 日間の滞在であった。今回の主な目的は交流および各種学会(研究会)における講演であった。滞在中 3 日間にわたり異なる 3 つの学会が開催され、私を含めそれぞれの先生方の講演プログラムが組まれていた。ひとつの学会は洛陽から離れた鄭州で開催され、斎藤先生、近藤先生はそちらの会場で講演された。いずれの学会も 150 名以上と多くの参加者により盛況で、河南省の看護協会長または副協会長が臨席されるほどであった。講演の合間に病院見学と近辺の観光名所を案内していただいた。病院は大学キャンパスから数百メートルと近い場所に位置し、それぞれの分野によって幾つかの棟に分かれていた。病院の雰囲気としては中国に共通した事情なのか、患者やその家族であふれかえり、受付窓口などには長蛇の列をなしていた。それを裏付けるように附属病院では一日平均 50 の手術が行われているとのことであった。案内いただいた小児科外来では、親子で肥満カウンセリングを受けていた。中国においても肥満は子供のころからの深刻な問題であるようだ。最近よく耳にする富裕層の増加と関係があると思われた。確かに病院の近くに建つスーパーマーケットを覗いたところ、多種多様な食材が陳列され、ひとつのボリュームも相当なもので、欧米のスーパーと同じような光景であった。他、私の希望で臨床検査室を案内していただいた。約 10 年前北京に訪れた時と比べ、分析機器などは近代化し、当時はなかった中国製機器も利用されていた。また、当該病院の特徴として、分析機器のない近隣の病院からの試料も受け検査を実施していた。日本に多く存在するコマースラボは都市部の一部を除きほとんどないとのことであった。

病院見学最終日に学生との座談会が設けられ、いくつかの質問を受けた。河南の学生も卒後の継続教育に関して興味があり、日本の実情について詳細な質疑応答が行われた。討議の中で私が興味を抱いたのは、学部教育のひとつに看護美学という科目があり、歩き方、立ち方、しゃがみ方、起き上がり方など美しくかつ負担がないような姿勢を学ぶ学問であった。重労働といわれる看護職には極めて重要な科目であると感じた。さらに中国の看護学部は 5 年制と 4 年制があり、共通試験で進路を選ぶそうである。最近、日本で失われつつある出世・向上心について学生に尋ねてみた結果、看護師として社会的責務を果たすために昇進したいとの回答に、相当な責任感を感じ取れた。到着した日はさほどではなかったが、日が経つにつれ気温は上昇、最後の日は今夏最高の 39℃を記録し、外出もままならない状況であった。最後に滞在期間終始、丁寧に案内いただいた実習の学生ならびに多大な配慮をいただいた赵杰刚先生、王朝娟看護部長、諸氏へ深謝したい。



第一附属病院総合診療棟



案内係の実習生



検査室のみなさまと



講演の様子(赵杰刚先生通訳)



学生との座談会



## 河南科技大学での国際交流報告書

国際保健看護学研究室 近藤麻理

2010年夏に、河南省洛陽にある河南科技大学と第一附属病院、さらに州都である鄭州での河南省看護健康教育学会などに参加させていただいたので、その報告をいたします。

日程：2010年8月1日～5日（4泊5日）

場所：河南省洛陽にて河南科技大学視察と病院での講演

河南省鄭州にて河南省看護健康教育学会での講演

河南科技大学での講演は、8月2日「日本の看護師の院内教育」をテーマに第一附属病院の看護師を対象に行いました。さらに、州都である鄭州では河南省看護健康教育学会で「日本の看護師の継続教育」について講演をし、多くの参加者から日本の看護教育や院内教育への質問を受けました。例えば、中国鄭州の病院が大規模であるため、新人が毎年200人以上入職するが、通例として各部署へ配置後の新人教育はすべて現場に任せきりだとのことでした。しかし、このような状況では新人教育の質や内容にばらつきが発生し、改善した方が良くと考えているが難しいとのことでした。日本の状況を知っていただき、いくらか参考になったこともあったようですが、私自身が、中国の新人・継続教育などの現状について知ることができ勉強になりました。次回訪問する機会があれば、中国で実践可能な新人・継続教育についても提案できると良いなと思いました。

河南科技大学には、日本で修士号、博士号を取得された趙先生がおられるため、今後の発展は十分に期待できますし、共同研究の可能性も広がっています。現地では、看護研究者が不足しており、現場の看護師や師長からは、共同研究を視野に入れた研究を指導して欲しいとの意見も聞かれました。さらに、本学学生の国際交流の受け入れも可能とのことですので、ますます中国とのつながりは深まることと思います。

今回の訪問では、大学関係だけではなく洛陽の文化を知る機会を得ました。世界遺産である龍門石窟には、世界中からの見学者が訪れており、岩に彫刻された仏像たちは何世代にもわたって彫られたものでした。どうしても最後の長い階段を登りたくなくて、しばらく下で休んでいたのですが、どうしても気になって登ると、見たこともない巨大な仏像が3体並んで黙って鎮座していました。熱い盛夏の地で、かたい石の上を歩き疲れていても、その得も言われぬ荘厳さには思わず「おおっ、」と声が漏れました。歴史や文化に感動したのも、また、古都、洛陽という地だったからかもしれません。

洛陽でのさらなる収穫は、洛陽料理の美味しさを知ったことでした。中国は地域によっては油が多い料理が多く、体調と合わない場合は滞在の楽しさも半減します。しかし、なぜこんなにもどの料理も美味なのかと疑うほど、洛陽の料理には箸を止めることができませんでした。帰国後も、洛陽の料理が恋しくて、洛陽料理のお店を探したほどです。残念ながら、日本には洛陽料理の店はほとんど見つかりません。また、洛陽に行って食べるしかないのだとわかり、いつかまた（料理を食べに）行こう！と固く決心したのでした。

## 河南科技大学との国際交流報告書

小児看護学研究室 出野 慶子

中国の洛陽にある河南科技大学臨床医学院や第一附属病院の方々と交流する機会に参加させていただきました。4泊5日の日程の中から、病院見学、糖尿病看護学会（交流会）、看護学生との座談会について報告いたします。

病院見学では、忙しい業務の合間に師長さんや看護部の方が時間を作って案内をしてくださり、私は小児科外来や小児病棟を中心に見学しました。現在の第一附属病院は1956年に建てられた病院であり、エレベーターのない3階に小児科外来は位置しており、とても混雑していました。小児がんや、感染症の子どもは別ですが、診察を担当する医師を家族が選択するシステムで、医師により診療料金は異なるようです。子どもの肥満を母親が心配して診察を受けている親子の場面を見学させていただきました。

小児病棟では、午前中にもかかわらず、祖父母をはじめとして大勢の家族が病棟にいらしたことが印象的で、大部屋は3床でしたが、家族が付き添っているのが狭く感じました。ちょうど、手足口病が病棟内で発症し、一部は隔離体制をとっていました。日本の小児病棟では、年少の子どもはベッド柵の高いサークルベッドを用いて転落予防をしていますが、こちらでは、成人用の柵のないベッドに乳児を寝かせており、家族が付き添うことによって、ベッド転落を防いでいるようでした。また、入院中の食事は自宅からの持ち込み食であったり、院内で配膳された数種類の料理の中から家族が選んで子どもに食べさせる体制です。看護師のかかわりの実際はわかりませんでした。病棟の環境としては、まだまだ改善の余地があるようで、プレイルームやシャワーの施設はなく、子どもの清潔ケアは家族に委ねているようでした。師長さんに1型糖尿病の子どもの入院についてお聞きしたところ、入院期間は7～10日と短く（日本の場合は2～3週間の入院となることが多い）、入院中に家族にインスリン注射などの手技は指導していますが、退院後のインスリン注射は、自宅近くの病院に通って打ってもらうか、家族が注射を打つかは、家族が選択するとのことでした。NICU（未熟児の集中治療室）も見学させていただき、外履きを靴カバーで覆い、マスクをつけて入室しました。7～8名の未熟児が保育器に収容されていましたが、レスピレーターやモニターを装着している児はいませんでした。小児病棟ではクーラーがないので、立ち話をしているだけでも汗がしたり落ちる状況でしたが、こちらではクーラーが効いており、室温調整がなされていました。NICUの環境はわかったものの、看護の実際まではわかりませんでした。しかし、見学後にNICUの責任者の方から「何か改善するところはありませんか？」との質問があり、看護の質を向上させていこうとする意欲が感じられました。

訪問3日目に糖尿病看護学会（交流会）が開催されました。私のプレゼンテーションのテーマは、「小児糖尿病ファミリーキャンプにおける看護師の活動」であり、これに合わせて、洛陽の各病院の糖尿病にかかわる看護師を招集し、糖尿病看護学会（交流会）を開催したようです。プレゼンテーションのテーマをお伝えしたのは1か月ほど前であり、日本においては、このような短期間では学会はもちろん、研究会を開催するのも難しいことでしょう。洛陽の看護協会の会長

さんのご挨拶で学会は始まり、参加者は約 160 名で、会場には空席がないほどでした。中国でも糖尿病をもつ成人・高齢者の問題はクローズアップされているものの、子どもの糖尿病にかかわる看護師は、あまりいらっしやらないようでした。パワーポイントを用いながら私が話す日本語を、その場で趙先生が中国語に訳してくださり、1 時間弱のプレゼンテーションをさせていただきました。糖尿病に関する専門用語も多々あるなか、趙先生はほとんど聞き返されることもなくスムーズでした。日本語でのプレゼンテーションが可能であったのは趙先生のお力であり、本当に感謝しております。質疑応答の時間が設定されていなかったのも、子どもの糖尿病における中国と日本の看護の違いについて、あまりわからなかったのは残念でした。

看護科の学生約 15 名、大学院生 5 名と臨床の看護スタッフを交えて座談会をする機会がありました。学生さんからの質問を通訳の方が訳してくださり、それに答えたり、逆にこちらから中国の看護事情や学生生活について質問するスタイルです。中国の大学での看護教育は 4 年間あるいは 5 年間であり、河南科技大学の場合は 5 年間の看護教育がなされています。臨床実習や学内における技術演習には、臨床の看護師が深くかかわっており、直接指導の体制をとっていました。また、「看護美学」という看護師としての立ち居振る舞いや身だしなみなどについて学ぶ科目があるようです。学生・院生側からは、実習内容、卒後教育、臨床での最新の知識・技術を教員が得る方法など、いろいろな質問が次々となされ、これからの看護を支えていく若者のパワーを感じ、1 時間半という短い時間でしたが、有意義な時間を過ごせました。通訳の方は、学生・院生さんの聞きたいこと、それに対する返答内容を的確に理解して通訳してくださったように思います。日本に 2 年ほど在住経験があり、日本の病院事情をある程度知っている方でしたが、後からお聞きしたら「神経を研ぎ澄まして通訳をしました。」と言われていました。この方には、病院見学や観光の際にもとてもお世話になりました。

病院見学时、看護科の 5 年生の学生さんが同行してくれました。「看護美学」を学んでいる学生さんだからか、身だしなみや姿勢・態度が美しく好感がもてました。しかし、私が感じたのは、学生さんの積極的な態度や新しいことを吸収しようとする意欲の高さです。私は中国語は話せませんし、学生さんも日本語はわからないので、英語でのやりとりでした。「英語で外国人と話すのは今日が初めて。」という割には、何を聞きたいのかが伝わってきました。中国は日本が 10～20 年かけて成し遂げてきたことを、急激なスピードで遂げている、という話を聞きます。現在の看護の質や環境は、まだまだ改善の余地が多いとはいえ、このような学生さんの積極性や意欲的な態度は、近い将来、中国の看護を変えていく力となることを感じました。

洛陽でのこれらの体験や歓送迎会の宴の席での交流をとおして、「国際交流」について少し理解を深めることができました。異なる文化をもつ者が共同研究を進めていこうとするには、まずお互いの信頼を得ることがとても大切であることがわかりました。また、共同研究の基盤づくりには年月がかかること、交流に関する条件を調整すること、相手の文化を理解することが重要であることも学びました。もう一つの収穫は、他の研究室の先生方とゆっくりお話できたことは、とてもよい刺激となり、楽しく実りの大きい体験となりました。

**国際交流委員会**

委員長 岡田 敦子  
副委員長 近藤 麻理  
委員 中原 るり子  
森 秀美  
細谷 幸子  
徳永 恭子

発行日 平成23年3月4日

発行 東邦大学医学部看護学科 国際交流委員会

〒143-0015 東京都大田区大森西4-16-20

TEL 03 (3762) 9881